「あら、獅童くん。いらっしゃい」
　小さな喫茶店のドアを開けると、唯一の店員であり店長でもある若い女性が、にこやかな笑みを浮かべて挨拶をしてくれる。
　いつもどおりの光景だ。
「失礼します、真絵さん」
　僕は挨拶をして、微笑み返した。
　彼女の名前は絵崎真絵、僕と親しくしてくれている近所の喫茶店の店長さんだ。
　先日結婚したばかりの新婚さんらしいが、旦那さんの方は夜まで会社で働いているので、顔を見たことはない。
　でも、熱々のカップルだという噂だった。
「今日は、学校はないの？」
　真絵さんがお冷を出してくれながら、首を傾げる。
　そりゃあそうだろう、今は平日の昼間だ。
　今日は彼女に手を出すために、わざわざ他の客がいない時間を狙ってやってきたのである。
「いえ、実を言うと……」
　僕はそこで勿体ぶるように一度言葉を切ると、精神を集中させて、『存在の根源の世界』へ入っていった。

◆

　世界が切り替わると、僕は目の前にある扉を開けて、真絵さんの『存在の部屋』に入っていく。
　いかにも大人の女性って感じの、しかしまだ若いことも感じさせる華やかな部屋。
　僕はその部屋の中から、彼女の存在に関わる基本的で重要な情報の書かれた掲示板を探し出して、そこに新たな定義を書き加えていく。
「さあて、今日はどんなのにしようかな？」
　もちろん、すぐにでも夫への愛情を失くさせて僕を愛させるようにするとか、なんでもこっちの言うことを聞く奴隷にするとかも可能だし、その日の気分によっては実際にそうすることもある。
　でも今日は、それではあんまりコロッと自分のものになりすぎて堕としたって

感じがしないし、面白くないなあという気になった。
「なら、こうしてみようか……」

　≪絵崎真絵は、前世では獅童蓮斗とこれ以上ないほどに熱烈に愛し合った恋人同士であり、来世で結ばれる約束をした。そのことをはっきりと覚えている≫
　≪絵崎真絵は、獅童蓮斗の頼みや質問にはなんでも応じる≫

「ふふふ……」
　さて、これで真絵はどんな反応を示してくれるだろうか。
　女の人って、前世からの恋人とか、そう言うロマンチックな話が好きだからね。
「まあ、最近は男も、やたらと異世界転生とかしたがる気もするけど……」
　僕はそう独り言ちつつ、この後の展開を楽しみにしながら、真絵の『存在の部屋』を後にした。

◆

　元の世界へ戻ると、時間は経過していない。
「実を言うと……。あなたと、いや、君と話したかったんだよ、真絵」
　僕は真絵の顔を真っ直ぐに見ながらそう言って、彼女の手を取った。
「あ……。蓮斗さん……」
　真絵は一瞬驚いたような顔をした後に、なにか後ろめたそうに顔を伏せる。
　僕は目を細めた。
「僕たちはこうして生まれ変わる前に、来世で、つまりは今の世で結ばれる約束をした。そうだよね？」
「……え、ええ……」
「なのに、君は他の男と結婚してしまったんだね」
　僕は咎めるようにそう言った。
「ご……ごめんなさい……」
　真絵は青ざめて、罪悪感に身を震わせている。
「しかも、その男とはずいぶん仲がいいって、噂で聞いたよ」
「あ、あの人と結ばれたときには、まだ前世の、あなたのことを思い出せていなくて……！」

　彼女は必死に弁解の言葉を口にする。
「じゃあ、その男と別れてくれるのかい？」
「そ、それは……」
　彼女は口籠って、泣きそうな顔になる。
　まあ、そうだろう。
　前世に僕と恋人同士だったって設定を書き込んだだけで、今の夫を愛している気持ちを消したわけじゃないんだから。
「……いいよ、別れたりしなくても」
　僕は彼女を苦悩させたいわけじゃないので、あっさりとそう言ってやる。
「えっ？」
「心変わりしたのを元に戻せと言っても難しいだろうし、君には幸せになってほしいからね」
「あ……ありがとうございます！　本当にごめんなさい！！」
　真絵はほっとした表情になった後、深々と頭を下げた。
　そんな彼女を見て、僕は微笑みながら付け加えた。
「ただ、一つ条件がある」
「は、はい、なんですか！？」
　彼女が身を乗り出してくる。
「心はその男のままでもいいし、結婚もしたままでいい。でも、僕とも付き合ってくれ。君の夫がいない間だけでいいから、僕にも、君を与えてほしいんだ。どうかな？」
　僕は優しい声で、彼女に提案した。
「はい……わかりました……。蓮斗さんさえ良ければ、喜んで……」
　彼女は、少し躊躇いながらではあったが、しっかりと首肯してくれた。
　もちろん、世間的には浮気ということになる。
　でも、今の彼女からしてみたら、『先約』をしていたのは僕の方だし、ってわけだからね。
「よかった。じゃあ、他にお客さんもいないみたいだし、今から少しデートに出かけないかい？」
「え、ええ。行きましょう、楽しみだわ」
　彼女も少しぎこちないながらも、嬉しそうに笑ってくれた。